



春厨夜ごと出奔する薬罐
まぼろしの花人ひとりわれに添ふ
田打桜縄文人は田を持たず
桜隠しかしづく音を聴くごとし
陽炎に触れし人より毀れゆく
ぬるる眼の先に宙あり孕鹿
飛火野に水ゆきわたり孕鹿
真つ直ぐに物言ふ勇氣花辛夷
衰へを肯へる日々ばつさり菜
夜桜の先へ先へと白狐かな
学舎の遺跡のごとし養花天
啓蟄やシーラカンスの水籠め
満開の桜の統べる鉄の街
胸中に広がる轍道乾く

佐藤映二
古畑恒雄
清水逍径
田中純子
岩井かりん
許勢元貞
唐澤南海子
有手勉
木幡テイ
黒沢孝子
小宮山秀子
金子圭子
二階堂なつみ
藤森泰子

菅原砂登子

子も夫もほめて育つよ桃の花
花の宴有象無象に穀象も
逝きて母畳に戻る蛙の夜
夭折の年譜のはじめ春灯
白魚舟祖のこゑ聞ける坂本九
木の根あき笑ひ罨の月山道
菜の花や死者を怒れど振り向かず
花の下うららうららと赤子老い
山國の鳥より汎き蝶渡り
蓬餅父の手元へ柩閉づ
万愚節おもちやに紛ふ炊飯器
雛の家バターと並べ蚕種子

野口美智子
長尾裕美子
米山節子
鎌田文子
山田一政
菅原ミヤ子
加瀬ひろし
森玲子
梶原夢乃
宮原桂子
竹岡みち子
市川敬子

不要なる物の多さよ春の雲
春昼や厨は修羅の炎立つ
手の甲へメモる介護士水温む

三水芽生
三品吏紀
安藤潤子

岳・見えたるひかり 六月

— 同人集・岳集・青雲集から

(478)

宮坂 静生

はじめに。しばしば知的感受性の大切を説く。直感的な感性に鋭さや強さを与えるのは知性である。どのようなことばを選ぶかによる。適切な例句ではないが自句〈軍艦に和して馴染まず春の海〉と横須賀詠の中では〈馴染まず〉に知的感受性をこめた。和していながら、春の海はどこか軍艦を受け入れていないのではないかと見える。こゝに誌想性が出る。

出奔する薬罐とはなにか

春厨夜ごと出奔する薬罐 佐藤 映二

「故人沢康夫さんに寄す」と前書。入沢さんは宮沢賢治学会代表理事で賢治との対話的な詩集もあり、『校本宮沢賢治全集』の編集者のひとり。賢治学会を介し映二さんと親しいか。入沢さんは私も敬愛する知人であり、「未確認飛行物体」〔春の散歩〕所収〕は好きな詩だ。水が入った薬罐が夜ごと台所をぬけ空を飛んで沙漠のまん中に一輪咲いた淋しい花に水をやる話。右の詩を踏んだ一句。知らないと思像句として解するだけであるが、私は『夜間飛行』（サンテグジュペリ著）のもじり〈薬罐飛行〉から〈夜間非行〉（深夜密会）まで連想する。俳句には引用句のコーラージュ（貼付）の技法が

う。平成の終り、古式ゆかしい儀式など目にしたことから触発された句か。作者はどこか巫女風な笑みをうかべる。

陽炎に触れし人より毀れゆく 岩井かりん

テーマは「毀れる」。新しい時代に一見皮肉にきこえるであろうが、時代の底流にはこんな不安がある。ITなどに関わり、先端をゆくと思っている人ほど。陽炎の時代へ突入か。

真つ直ぐに物言ふ勇氣花辛夷 有手 勉

ストレートな清冽な作。春早い辛夷の果敢な繊細さもよく照応している。当然、自戒をこめての主張である。

今月の秀句

ぬるる眼の先に宙あり孕鹿 許勢 元貞

〈飛火野に水ゆきわたり孕鹿〉（唐澤南海子）も同じ孕鹿詠。ともに佳句。掲句は「先に宙あり」の知性のひらめきに独自性がある。孕鹿の生理的な生態「ぬるる眼」にも適度の発見があろう。孕鹿が見た宙はたゞ鹿が見た宙とは当然違う。動物としての人間には感知ではない原始性ともいうような特異さがあろう。唐澤南海子句の風景句もゆたかな光景。こゝでは許勢元貞詠の知的感受性に注目した。

ある。秀逸。

まぼろしの花人ひとりわれに添ふ 古畑 恒雄

愛妻家であった作者。夜のさくら狩をしみじみ連想する。

田打桜縄文人は田を持たず 清水 道径

田打桜は辛夷。白い花が咲き出す春先を目安に田打ちがはじまる。農事暦の指標の花。稲作は天皇家の祖先が伝えた生業。大方は弥生時代（紀元前三世紀から紀元後三世紀）から始まるという。それ以前の縄文時代（紀元前一万年前後から前四世紀頃まで）の人たちは田作りを知らなかった。狩猟採集のため獲物を求めて移住育し、人類のジブシー時代。そんな時があったのかと、改めて辛夷を見ながら実感したもの。新天皇のお田植姿から農耕稲作こそ天皇家のシンボルと想ったりもする。

桜隠しかしづく音を聴くごとし 田中 純子

桜隠しは桜を隠す雪の光景。「かしづく」はこゝでは神に仕える。神を祀る意か。桜隠しの神々しいさまから古に天地の神に仕えた敬虔な儀式の音を聴くような気持になるとい

衰へを肯へる日々ばつさり菜 木幡 テイ

ばつさり菜がおもしろい。福島・宮城あたりで用いる語で、白菜などの莖立をいう由。冬越しをした菜や大根の春先の莖立は、見る人にどっと老いの意識を与えるものらしい。どこかいじらしさを感じさせる。

夜桜の先へ先へと白狐かな 黒沢 孝子

実景か。どこか妖しい女人風情か。蕪村調。夜桜は白狐を秘めた花といえ、そんな妖艶さもある。実直な作が多い作者には珍しいあそびの作。余裕か挑戦か。

学舎の遺跡のごとし養花天 小宮山 秀子

廃校詠とも受けとれるが現に使われている学校を称したのであれば鋭さは格別。花ぐもり（養花天）の下で。わが母校への思いか。建物は勿論、先生も。愛しい批評性がある。

啓蟄やシーラカンスの氷籠め 金子 圭子

三億五千万年前の「生きる化石」といわれる古代魚だが、マダガスカル島近海で生存がたしかめられたという。啓蟄、陸では地虫が出る頃、海底の魚の氷籠めとの対比に意外な照応があり、ゆきとどいた構成がなされている。演劇人の幅広い見方がある。

満開の桜の統べる鉄の街 二階堂なつみ

拓くことば ⑤ 自句寸言⑦「鞠祭」

軽井沢鞠祭はすみたるか 平成十年

「岳」（平成十一年一月号）所載。「葦の穂は聖のごとし立ち枯るる」「小春日や包み釦の牧師服」も同時作。軽井沢は中山道の宿場。鍛冶屋もあり馬の鉄杵をなおした。中軽井沢は旧く杵掛と呼ぶのは周知。鞠祭は旧暦十一月八日。金屋子神が主神。お稲荷さんを祀るところが多い。浅間三宿は表の貌ばかりが今脚光を浴びているが根っ子のところが懐かしい。『山の牧』所収。

わが胸の底方に積石寒に入る 平成十一年

「岳」（同年二月号）所載。句集『鳥』（花神社・平成十五年刊）には「徳竹正道を偲び」と前書。同じく「初音笛土のにはひのはつかにす」が「岳」に出る。正道の死は前年十月か（辰野利彦から）。長野商業高校長の後、松本歯科大学の英語講師を歴任。私は小諸時代に親交があり、アメリカ仕込みの英語教師で、松峰隆三門下。斬新な発想を持った行動派。伴野敬一、竹内修平、荻原時男といった先生方の顔が浮かぶ。北信中野出身。晩年が気になり、上掲句とも往時回想句。『鳥』所収。

かなしみを腸に貯めたる椿かな 平成十一年

「岳」（同年二月号）所載。椿好き。椿苗を貰い狭い庭に植えた。わが家には四種類。寿台に新築時に妹晴子の夫（藤森平一）が植えてくれた乙女椿。その後富山の福光の椿植栽家仕立てを「岳」北陸支部からプレゼントされる。前田普羅好みの種か。地貌家本家祝いのつもり。しかし豪華なものほど腸に哀しみが貯まっている感じ。椿の悲哀を連想。椿詠は多いが本命がない。『鳥』所収。

雛の世の永くもがなと雛あられ 平成十一年

「俳句現代」六号（平成十一年五月）「六十代作品大特集」所載。明るい句が好きで、雛と椿は多い。「雛屏風孔雀起居に風立てて」も同時詠。雛は必ず飾る。貧しくても母が節句を大事にした。祖母仕込み。雛を飾り、平和な世が長く続くようにと願う。雛あられをぼりぼり食べるのも好き。お雛さまの代わりに食べ、上掲句が誕生。『鳥』所収。

木曽谷の花を率ゐてみまかりし 平成十一年

「岳」（同年五月号）所載。「悼 池田作「二老」と前書。同年四月十八日葬儀、弔辞を呈上。晩年実心熱心。人柄が万人に愛され、花があった。参列者千人を超す大葬。小口理市さん同行、木曽上松材木会館が会場。お孫さんがわが菩提寺桑原龍洞院のお大黒さん。『鳥』所収。

「鉄の街」は鉄鋼業の盛んな街の意か。桜はどこにでも似合うが、鉄の街の硬質感と対比した点が大胆。

胸中に広がる轍道乾く 藤森 泰子

「道乾く」が春の地貌季語。春先のいそがしさを暗示した句か。独自の世界を模索している作者。

他に同人集から推薦候補作を掲げる。

自閉症とふ子の手の熱し初燕 松岡 節子
少年逝き雪代山女翻る 瓜田 紀子

ほめて育つのが子や夫とは余裕

子も夫もほめて育つよ桃の花 野口美智子

周知の俗言を巧みに生かし、桃の花の華やきが明るい。前向き思考のいきいき家庭運営がいい。さしずめ大母のような智者である。それにしたがう夫や子も立派。

花の宴有象無象に穀象も 長尾裕美子

「春高樓の花の宴」ではなく、こゝは庶民の花筵。有象無象（だれもかれも）に米にたかる穀象までもお出まし。炊かれたおにぎりに穀象でも入っていたものか。勝手なことを調子ついでに想像したのであろう。自在さがいい。

逝きて母畳に戻る蛙の夜 米山 節子

代々の大農家。老健施設あるいは入院先から、わが家の畳の上へ。畳の上で往生したいとのせめてもの母の願いを叶えてやった。夜蛙も葬送の曲代り。しんみり心にしみる。

天折の年譜のはじめ春灯 鎌田 文子

幸せな誕生から将来を期待され、小学校はどことと整然と記された年譜を見ながら、ひとの運命のなりゆきのわからなさを痛感している。春灯のさりげなさが無常。

白魚舟祖のこゑ聞ける坂本九 山田 一政

秋田八郎潟の白魚舟か。その元祖は明治三十五年、坂本九の祖父が霞が浦から移って始めたものという。日航機墜落事故で死した九ちゃんのことを思ったものか。歴史の一コマをやさしく生かした一句に目をとめた。

木の根あき笑ひ囁の月山道 菅原ミヤ子

早春に木の根が開いたのが「笑ひ囁」のごとしというのであろう。庄内の御山月山への山道を手堅く捉えた地貌詠。

菜の花や死者を怒れど振り向かず 加瀬ひろし

なぜ早々に逝ったんだと死者に怒りをぶつけても、死者は無言。明るい菜の花の点描が痛々しい。朴訥な地の人の作。

花の下うらうらと赤子老い 森 玲子

「赤子老い」が凄い。赤子からの幻想か。あるいは赤子の

ような老人を捉えたものか。擬音はそんな感じ。

山國の鳥より 𦵿き蝶渡り 梶原 夢乃

〈山国の蝶を荒しと思はずや〉『六百句』(虚子)をさりげなく踏まえたものか。「𦵿き」が眼目。字形にも工夫。

蓬餅父の手元へ 柩閉づ 宮原 桂子

折からの蓬餅を柩の父へ抱かせるのは素朴。愛情とは自由。

万愚節おもちやに 紛ふ炊飯器 竹岡みち子

かつての竈での炊飯のイメージが作者にはしっかりありとあるものか。キッチンに置かれた炊飯器への批評が、あそび半分

今月の秀句

ばっけ摘む風がふれゆく金勢神 菅原砂登子

ばっけは作者が在住する岩手県花巻の他、青森県津軽さらに秋田県から山形県にかけての路の臺の方言。ばっけの匂いを運ぶ風が金勢大明神(金精様)にふれ、励ましていくのが愉快。近頃つれ合いの「物がどうも元気がないと案じていた。春先の野のものを摘み、馴染んだ風から金勢神のエネギーでも少しお借りすればとの算段の一句。いうまでもなく金勢神は男根のレプリカ風の石神さま。さてご利益は？

の世相への批判にもなっている。コンパクトに軽快に。じわじわと鋭い作者。

雛の家バターと並べ 蚕種子 市川 敬子

ケース入りのバターと蚕種子が並ぶ納戸の棚か。雛段ではないであろうが、まさに雑居風。これが春先、てんやわんやのわが家とは、親しみがわく。

他に岳集から推薦候補作を掲げる。

贅沢な時は直ぐ過ぐ 葱の花 渡辺 秀雄
春運び 寄せくる 波や 太平洋 鈴木美代子

青雲集―おそるべき新人力

不要なる物の多さよ 春の雲 三水 芽生

盛岡の十九歳の新人。啄木ではないが、春の雲から「不要なる物」を見つけた点が嬉しい。勿論身辺へも目がとどく。

春昼や 厨は修羅の炎立つ 三品 吏紀

作者は三十代。厨が職場の職人さん。なにげない春昼がいきいきしている。ことばに力みがない。新しいナと思う。

手の甲へメモる 介護士水温む 安藤 潤子

発想は珍しくないが、季語がごく自然。忙しくなり始める早春。